

体験と認識のはざままで

——初期草稿におけるシュッツの問題関心と意味生成——

高艸 賢

本稿の目的は、A. シュッツがいかなる問題関心の下で「意味問題は時間問題である」という定式化を行ったのかを解明することである。シュッツは社会科学の基礎づけをめぐる問題状況に自らを位置づけつつ、認識の論理学たる新カント派や体験の直観的理解を掲げるディルタイによる基礎づけの試みの前提を修正する必要があると考えた。持続とその空間化という対立を基調とするベルクソン哲学を受容する中で、シュッツは持続における記号生成の問題が認識問題としての基礎づけの前提であると考えた。理念型の構成によって意識を分析する生形式理論によって、シュッツはこの問題を記憶付与された持続における体験の記号化と意味の生成として論じた。シュッツが意味問題を意識内的な時間の流れとの関係で論じたのは、社会科学の基礎づけ問題において体験と認識を架橋しようと試みたためであった。

1 はじめに

A. シュッツは日常生活の次元から科学的観照の次元まで幅広い体験領域を考察しているが、それらの中心に位置するのが意味 (Sinn) という概念である。世界の中を生きる人間は、自らの体験をその直接性において見いだすことはなく、常に意味を通じて世界と関わっている。意味概念を用いたシュッツの分析が、日常的知識による理解から科学的概念構成に至るまで多岐にわたることは、よく知られている。

加えて、彼が主著においてベルクソンの生成哲学や後期フッサールに依拠しつつ「意味問題は時間問題である」(Schütz 1932: 9=2006: 35) というテーゼを立てていることも、よく知られている。ここで言う「時間」とは意識において体験される時間のことである。このテーゼによってシュッツは、意味の構成が体験の流れの中で遂行されると主張している。こうした観点

から、『社会的世界の意味構築』においてシュッツは意味構成の第一の契機を「体験流への反省的対向 (Zuwendung)」に見いだしている¹。

シュッツの意味概念に関しては、それが現在性を扱うことができないという評価²、間主観性を適切に扱うことができないという評価 (Waldenfels 1980=1989; 山口 1982)、シュッツの中で論理的に一貫していないという評価 (Renn 2006) がこれまでの研究で提出されている。しかし、それらの評価はいずれも主に『意味構築』の批判的検討の中で提出されたものである。『意味構築』では、孤独な自我および社会的世界における意味構成の体系的かつ緻密な分析がなされている反面、シュッツが直面した同時代的問題状況と解決策の連関が見通しづらくなっている。完結した理論体系としての『意味構築』を検討するだけでは、却ってシュッツ自身が意味概念にこめた理論的意図、つまりシュッツがいかなる目的のために意味概念を論じているの

か、を解明する方向性を閉ざすことにつながる。先行研究におけるシュッツの意味概念の否定的評価を再考するには、まずシュッツ自身の問いを再構成せねばならない。

一般的にシュッツの研究関心は「社会科学(理解社会学)の哲学的基礎づけ」にあると言われ、シュッツ自身も学生時代の早いうちから基礎づけへの関心を抱いていたと回顧的に記述している (Schütz 2009: 295)。確かにこの事実を考慮すれば、思念された意味の理解を標榜する理解社会学の基礎づけを試みるシュッツにとって意味概念の検討は避けて通れない課題であったことは容易に理解される。しかし、この事実はシュッツがいかなる関心の下で「意味問題は時間問題である」という定式化を行ったのかという疑問に有効な解答を与えるものではない。この疑問を解決することが本稿の目的である³。

この疑問の解決のために本稿が参照するのが、シュッツ自身の置かれた問題状況である。シュッツが理解社会学の基礎づけを通じて応答を試みた問題状況は、新カント派やディルタイといった、シュッツと同時代に行われていた社会科学の基礎づけの様々な試みと不可分である。そこで本稿はまず、シュッツがそれらの試みに対して向けた批判を検討することで、シュッツの置かれた問題状況を示す⁴。同時代に行われていた基礎づけの試みはシュッツの目には前提からして誤っているように映ったのであり、これを刷新することがシュッツ自身の課題であった。

基礎づけ問題の正しい出発点を提供するものとしてシュッツが目指したのは、ベルクソンの哲学であった。ベルクソンにおける持続とその空間化という議論に依拠しつつ、シュッツは通常の認識問題の手前に自らの解くべき問題——記号生成の問題——を見いだす。そして、

その問題の解明の途上で意味概念を内的持続体験との関連で特徴づけるに至るのである。

以上の内容が最も明瞭に示されており本研究が重点的に検討するテキストは、1920年代に執筆された未完の草稿「生形式と意味構造 (Lebensformen und Sinnstruktur)」およびその構想メモ (Schütz 2006=1982) である⁵。1920年代の「ベルクソン期」(Wagner 1977: 187) は、フッサール現象学の受容に先立つシュッツの思考の萌芽期である。『意味構築』の解析に焦点化していた先行研究は、この草稿における意味概念の位置づけに十分注意を払ってこなかったが、シュッツの意味概念を彼自身の問題関心の下で理解するためにはこの作業が不可欠である⁶。最終的に本稿は、シュッツが意味概念によって体験領域と認識の領域との架橋を試みたことを示す。

2 社会科学の基礎づけにおける体験と認識

シュッツにとって、同時代的な社会科学の基礎づけの試みは「最近50年のドイツ精神史における最も注目すべき現象のひとつ」(Schütz 1932: 1=2006: 25) であった。シュッツが自らを規定する問題状況は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての社会科学基礎論をめぐる思想的布置を踏まえることで理解可能となる⁷。「理論的定式化はいわば時代の精神から、著者が自身の科学共同体と内的に対話することを通じて出現する」(Srubar 1984: 164) のである。同時代の思想を補助線とすることで、シュッツの基礎づけの試みがそれまでの社会科学の基礎づけに対する批判の上に成り立っていることが理解される。

基礎づけ (Grundlegung)、根拠づけ (Begründ-

ung)、基づけ (Fundierung) という言葉のニュアンスの差や論者間での語義の相違はみられるが、一般的に社会科学の基礎づけとは社会科学の認識の成立根拠を反省的に解明することである。その意味で基礎づけ問題は認識問題 (Erkenntnisproblem) であり、カント的認識論とは大きく異なる問題設定を試みるシュッツにおいても認識問題への貢献を見込んでいることは否定の余地がない。

2-1 新カント派による認識の論理学

はじめに、社会科学の基礎づけを認識の論理学として遂行しようとする新カント派の試みを検討する。新カント派は19世紀後半に出現した哲学の学派であり、カントの認識批判を継承して科学の哲学的基礎づけを試みた⁸。シュッツ自身はウィーン大学の学生だった頃に新カント派の学説を学んでいた (西原 1997: 20; Schütz 2009: 295)。新カント派には主に自然科学の認識論的基礎づけを試みたマルブルク学派と文化科学の基礎づけを試みた西南学派が存在し、シュッツの回想には H. コーエン、P. ナトルプ、E. カッシーラーといったマルブルク学派哲学者の名前のみが挙げられているのであるが (Schütz 2009: 295)、ここではマルブルク学派と西南学派を一括して「新カント派」として扱いたい。

新カント派がカントへの還帰を主張するとき、彼らが依拠するカントの学説は主に認識論である。彼らの功績を「認識論という分野に哲学と科学の土台となる役割を認めることによって、哲学を認識論として復権させた」 (Schnädelbach 1983=2009: 150) という言い方でまとめることも可能である。

例えば、H. リッカートは文化科学の特徴づけに際して「問題は論理学 (より精確には科学

論乃至方法論) の一部分であるから、種々の自然科学的及び文化科学的諸学科の特殊な内容には、我々には関係がない」 (Rickert 1926=1939: 24)⁹ と述べている。リッカートは心理主義に対して論理主義の立場から喝破した師のヴィンデルバント (向井 1997: 91) と同様、文化科学与自然科学を分ける基準を方法における相違に見いだしており、「個別科学的叙述の二つの基本形式」 (Rickert 1926=1939: 25) こそが重要だと考えている。従って、リッカートら新カント派にとって問題は科学的概念構成の次元に存在しているのである。

高坂正顕によると、学的ならざる現実界を構成する「構成的現実形式」としての概念構成と科学的な「方法論的認識形式」とを区別するリッカートとは異なり、コーエンは思惟の一元論を主張しているという (高坂 1940)。コーエンにおいては、「対象が存在していると云うことは、直ちに、又同時に対象が認識されていることであり、且つ対象を認識していること」、つまり「存在即思惟」という立場が採られており、思惟による感性の克服が想定されている (高坂 1940: 134-5)。このように新カント派の内部でも感性と悟性の関係をめぐるカント解釈は様々であるが、総じて言えば新カント派の試みは、対象に関する先行把握を形而上学として排斥し、概念形成および判断形成の論理学に関わるもっぱら形式的な観点のみを認める (Schnädelbach 1983=2009: 80) という点で「認識の論理学」であると言える。

新カント派の特徴としてシュッツが挙げるのは「認識対象を最小限のカテゴリーの下で形式的手続きに従って分類しようとする野心」 (Schütz 2006: 185=1982: 15) である。従ってシュッツも新カント派の試みを認識の論理学として捉えていたと言える。そしてまさにこの特

徴がシュッツの批判対象になっている。

1920年代に書かれた草稿の構想メモにおいて、シュッツは「直近の半世紀における哲学の展開は、精神科学に対して何ものをも成し遂げることができなかった」(Schütz 2006: 185=1982: 15) ことの原因のひとつに新カント派を挙げ、激的な批判を加えている。科学的認識の論理学たる新カント派はその認識目的を「生命なき世界 (unbelebter Welt) における法則性を探し出すこと」に置くが、それは「生きられる、理解可能な専門分野、つまり精神科学の対象に関しては、無用なのだ」とシュッツは論じる¹⁰(Schütz 2006: 186=1982: 15)。科学的概念構成の次元にとどまる限り、社会科学の対象たる生きられる世界——のちに現象学の語彙を用いて生世界 (Lebenswelt) と呼ばれることになる——との関わりは絶たれたままなのだ、ということである。加えてシュッツは「認識論と論理学は決して最も基礎的なものではなく、上部構造 (Oberbau) (-特殊事例 (Spezialfall)) なのである」(Schütz 2006: 186) と述べる。社会科学の概念構成以前に対象が生きられているという問題だけでなく、社会科学の認識それ自体が私たちの生きる世界においては派生的な位置にある、という問題をもシュッツは指摘しているのである¹¹。

認識問題は科学的概念構成の問題にすぎない、という新カント派の立場を誤った前提であるとして退けつつ、シュッツが上部構造としての論理的科学に対して基礎的なものとして位置づけるのは、「前科学的領域」(vorwissenschaftliche Sphäre) である。この領域は「日常生活によって営まれ、方法的に純粋な科学によって軽蔑され、ある〔任意の〕科学が他の科学〔の仕事である〕として追放してきた」(Schütz 2006: 187=1982: 16) ものである。前科学的領域が基礎的であるというのは、第一にそれが社会科学

による概念構成に先立って存在するという意味において、第二にそれが概念的認識の発生論的起源であるという意味においてである。前科学的領域における人間の生を条件づける基礎構造——社会科学の営為もそれによって条件づけられる——の探究に向かうことで、シュッツはいわば科学認識論から哲学的人間学へと問いを進める必要性に直面する。

2-2 デイルタイにおける体験と理解

シュッツにとっての問題状況を浮び上がらせるためのもう一つの補助線は、体験 (Erlebnis) と理解 (Verstehen) という概念から精神科学 (Geisteswissenschaften) の基礎づけを試みた W. デイルタイの議論である。シュッツ自身のデイルタイへの言及は草稿においても『意味構築』においても限定的であるが、本稿にとっては一瞥の価値があると考えられる。

カントにならい「歴史的理性批判」と自己規定するデイルタイによる精神科学の基礎づけも、基本的には認識論として遂行されているが、新カント派とは異なる点が二つ存在する。それは第一に、自然科学と対置される精神科学の基礎を生および体験に置いている点、それゆえ第二に基礎づけの試みが人間学ないし「人間存在論」(丸山 1985) を含んでいるという点である。

第一の点はデイルタイ自身の認識論への批判において明らかである。デイルタイは旧来の認識論について「ロック、ヒュームおよびカントが構成した認識主観の血管を流れているのはなまの血液ではなく、たんなる思惟活動としての理性の薄められた液にすぎない」(Dilthey 1922=1979: 13) と批判し、生ける人間に基礎を置いた精神科学の必要性を説いている。デイルタイは体験・表現・理解の三項を精神科学の構

成要素として規定することで、生き生きした人間を捉える精神科学与自然科学との境界を設定している (Dilthey 1927=1981: 22, 63)。

デイルタイのいう理解とは、一言でいえば表現された体験を追体験することである。それゆえ、新カント派が概念構成を問題にしたのとは対照的に、デイルタイは概念による理解は不可能であると主張する。すなわち、精神科学の原則は「心的状態を全体的に、直接知ること、および追体験においてその状態を再発見すること」「生が生をとらえる」ことに存するのだ、という主張である (Dilthey 1927=1981: 84)。そこでデイルタイの基礎づけの試みは科学的概念構成の次元を離れ、体験・表現・理解の連関を哲学的人間学として展開することになる。これが新カント派との相違の第二点目である。

生を出発点とし前科学的領域を扱うデイルタイの議論は、先述したシュッツの新カント派に対する批判と接続可能であるように見える。しかし、まさにこの体験と理解という概念の規定をめぐる、シュッツはデイルタイを批判するのである。シュッツは『意味構築』において次のように述べている。

科学は「合理的」であるべきである。したがってデイルタイの、厳密に合理的な科学にいわゆる了解科学 (Verstehenswissenschaft) を対置するような間違っ了解釈において、しばしばみられる試みに対しては、ヴェーバー社会学における理解の方法もまた、合理的判断の行使であることを繰り返し力説しなければならない。いわゆる了解科学は、形而上学的前提や価値論的前提から出発することによって、あるいはもはやそれ以上には正当化しえない「直観」に従うことで、与えられた資料を正確に概念的に取り組む方法とは異なる方

法でその認識目標に到達できると称する。

確かに了解科学の公準は、歴史的にみれば、生き生きした体験の把握の際に合理的専門科学が課せられている諸々の制約を突破する要求から発生したものである。しかしながら生 (Leben) と思考 (Denken) とはまったく別のものである。科学は、たとえその主題が生、社会的世界における生であっても、それは思考の事柄にとどまる。それゆえ科学は、曖昧で不明瞭な感情移入や前もって与えられた価値に基づいて行うことも、概念的にみて思考の厳密さを欠いている記述に身を委ねることもできない。(Schütz 1932: 275=2006: 358)

体験の直観的理解を社会科学的認識として見なすデイルタイに対し、シュッツは認識を概念的思考にのみ認める。つまり、対象の理解を目的とする社会科学の営為は必然的かつ本質的に思考の領域に存するのであり、直観的に「生が生をとらえる」というデイルタイの理解の規定は、思考によってのみ生に接近できるという社会科学の根本事実を把握できていない、というわけである。デイルタイは認識問題は直観によって克服されるという誤った前提に基づいている、とシュッツには思われたのである。

社会科学の哲学的基礎づけをめぐるシュッツが置かれていた問題状況は以上のようなものである。一方で認識の論理学をめぐる新カント派は科学的概念構成のみに焦点化し前科学的領域を無視した議論を展開しており、他方で体験の直観的理解という方法に依拠するデイルタイは社会科学が概念的な営みであることを見落としていた。いずれの基礎づけもシュッツは前提からして誤っていると考えたのである。したがって、シュッツは正しい前提の下で基礎づけの問いを立て直すという課題に直面していたと

言える。そして、以下で明らかになるように、この正しい前提をベルクソン哲学が提供しているとシュッツは考えたのである。

3 シュッツのベルクソン受容と基礎づけ問題の再設定

3-1 ベルクソンの生成哲学における持続とその空間化

ベルクソンの哲学の特徴は、内的に体験される時間である「持続 (durée)」の世界と持続が空間化された世界とを峻別する点にある。量的・数学的な時間の世界や概念的思考の世界は空間化された世界であるのに対し、質的で連続的な時間の世界は持続の世界である。両者の相違を説明するため、ベルクソンは鐘の音を体験するふたつの仕方を例に出している。

第一の場合、わたしはこの断続する音感覚 (sensations successives) の一つ一つを記憶し、それを他の音と組み合わせると一つに取りまとめ、今までに聞いたことのあるメロディやリズムとして聞く。この場合には、わたしは鐘の音を数えることはしないで、数えられる鐘の音がわたしに与えた、こう言ってよければ、質的な印象を受け入れているのである。第二の場合、わたしは意識的に鐘の音を数えようとする。そのときには、わたしはそれらの音を相互に引き離すことになるだろう。そして、この分離が行われるのは、ある一つの等質的な場においてであり、その場においては、鐘の音はそれぞれが持つ質を奪われ、いわば内実を失い、その経過の均一な痕跡だけを残すことになる。(Bergson 1908: 66=2010: 85-86)

鐘の音を単一の流れとして聴く場合、私たちは

メロディやリズムの体験の内側に没入し、個々の音を渾然一体として体験する。これに対し、鐘の音を個別の音に分解して聴く場合、私たちは鐘のリズムの体験の外側に身を置き、「何回」あるいは「何秒」といった記号の表象においてこれを捉える。前者は持続の世界に、後者は持続が空間化された思考の世界に属する。

前者のような体験をベルクソンは「不可分多様体ないし質的多様体 (une multiplicité indistincte ou qualitative)」と呼ぶ (Bergson 1908: 80=2010: 103)。数量的単位の離散的集合とは異なり、質的多様体は相互浸透 (se pénétrer) によって統一性を作り上げている。持続における相互浸透は「一つに溶け合ったものとして、過去の諸状態を現在の状態に有機的に統合する」(Bergson 1908: 76=2010: 98) こととして説明される。例えば「ド-レ-ミ」という音を順次聴く場合、「レ」の音を体験している私にとって、「ド」の音の体験はたった今終わった体験、〈過去〉の体験である。しかし「ド」の音の体験は消滅して虚空へと去るわけではなく、何らかの形で保持されているがゆえに、「ド-レ」をつながりとして体験することができる。「レ」の音は直前の「ド」の音との関係で体験され、かつ「レ」の音が体験される瞬間には直前の体験が「ド」の音として保持されている。「ミ」の音についても事情は同じである。瞬間的¹²な体験同士のこのような関係が、相互浸透という言葉で含意されている事態である。

これに対し、鐘の音の例における第二の体験の仕方のように、持続の現象はしばしば思考において捉えられる。思考は異質で連続的な流れとしての持続を等質な空間的事象に置き換える。ベルクソンはそのような働きを有するものを記号 (symbole) と呼び、計測時間と言語をその代表的なものとして扱っている。日常生活

において、「われわれの意識は、物事を区別するという飽くなき欲望に苛まれながら、現実を記号に置き換えてしまう、あるいは記号を通してしか現実を見ない」(Bergson 1908: 97=2010: 125) ものであり、自我の深層にある持続や質的多様体は「一般的な社会生活の要請や、殊には、言語の要請」(Bergson 1908: 97=2010: 125) の下で覆い隠されてしまうのだとベルクソンは論じる¹³。

相互浸透する内的持続とそれが空間化されたもの(あるいは空間化する記号)とを対立させるベルクソンの哲学は、「生成の哲学」であると言われる。持続における体験が生成する(仏: *devenir*, 独: *werden*, 英: *become*) という表現をベルクソンもシュッツも多用する。生成という事態を守永直幹の言葉を借りて比喩的に述べれば、「過去を現在に統合しつつ坂道を転がるように私たちの生は拡張する」(守永 2006: 42) ということである。持続する生は不断の生成変化の過程にあり、これをベルクソンは空間化され記号化された存在と対比する。

3-2 シュッツによる基礎づけ問題の立て直し

以上のベルクソン哲学を踏襲することで、シュッツは基礎づけ問題に関して新カント派やデイルタイに代わる新しい出発点を手に入れている。第一に、前科学的領域を扱うための概念装置として「持続」「イメージ (Bild)」「記憶 (Gedächtnis)」「記号 (Symbol)¹⁴」といった概念を取り入れている。イメージというのは体験印象を指すベルクソン由来の概念である。第二に、シュッツがベルクソンについて「体験それ自体と体験の反省の間の、原理的かついくつかの理由から重要な区別を現代哲学に押し付けた最初の哲学者」(Schütz 2006: 50=1982: 32) と

して評価していることから分かるように、ベルクソンにおける持続とそれが空間化されたものとの区別をシュッツは生(体験)と思考(反省作用、概念的認識)の峻別として引き継いでいる。第三に、言語的思考が体験を必然的に記号化することによって持続への沈潜を阻害すると考えたベルクソンにならない、シュッツも思考によって生の領域に接近することの原理的不可能性を指摘する。旧来の認識問題が「内的なもの(非延長的なもの)と外的なもの(延長するもの)はいかにして関係するか」という問いを立てるのに対し、シュッツは「延長しないものが延長するものになんらかの関係を持ちうるのはいかにしてか、ということは私たちには把握できない (unfassbar) のである」(Schütz 2006: 61=1982: 40) と反論する。

重要なのは、シュッツのベルクソン受容は言葉遣いの水準にとどまる表面的なものではなく、持続や体験自体と空間化・記号化されたものとの対立という思考方法の水準における受容であったことである。ここにおいてシュッツは、体験それ自体は前記号の領域に存在すると捉える。そのつどの体験印象を純粹知覚イメージ (*reines Wahrnehmungsbild*)¹⁵ と呼ぶシュッツは、「純粹持続の領域には記号関係は存在せず、それぞれの〈今〉〈このように〉における変化する質体験と純粹知覚イメージのみが存在する」(Schütz 2006: 82=1982: 54) と説明している。

このような観点の下、シュッツは基礎づけ問題それ自体を記号生成の問題として立て直す方向に進むことになる。まずシュッツは認識論的問題としての基礎づけ問題を次のように説明する。

私たちは科学を行うときには意図的に「空間時間的」に規定された概念の領域で行うで

あろうから、反対に私たちの課題は、科学すなわち概念的・カテゴリー的に把握可能なあなたの経験領域——あなた体験 (Du-Erlebnis) は概念的・カテゴリー的に把握にはるかに先行しており、前者は後者を条件づけることによってまさに後者に抵抗しているのであるが——は可能かどうか、どのような仕方において可能であるか、を探究するという課題であり、また、「記号」つまり言語的に規定された経験概念の圏内から歩み出ることなく、あなた体験という非合理的な根本体験 (...) を合理的な学問領域において考察するためには、そのような [合理的] 科学はどのような方法を用いねばならないのか、を探究するという課題である。(Schütz 2006: 53=1982: 34)

ここでシュッツは、社会的世界における「あなた体験」を合理的に概念操作する科学に先立つもの (つまり前科学的領域の体験) として位置づけつつ、記号的・概念的営為としての科学が体験の領域を把握することが可能であるか否かという問題を提示する。

一見するとこれはシュッツが否定する旧来の認識問題と同じであるように見える。だがむしろシュッツは認識論的問題構制の成立に先立つ問題領域を指摘している。シュッツの関心は、旧来の認識問題が「自らの問題の解決を前提としているということ、つまり、私たちが持続の領域と延長の領域の両方に属していることを確信することによってのみ認識問題 [の解決] は一般に可能であるということ」(Schütz 2006: 64=1982: 42) を示すことにある。「社会科学の認識はいかにして可能か」という問いがおよそ問いとして成立しうるのであれば、それに論理的に先行して解決されていなければならない問題があり、それは内的持続の領域と外的延長(持

続が空間化・記号化されたもの) の領域の両方に私たちの体験が関わっているという問題である。内的領域と外的領域のどちらか一方を他方に還元するのではなく、体験者における両者の関係を示すことがシュッツの問題関心である。

ここにおいて、シュッツの問いは「いかにして延長する物が私の延長しない知覚に入り込むか」という形ではなく、「イメージはいかなる道を進んで純粋知覚から概念へと至るのか」という形をとる (Schütz 2006: 64=1982: 42)。体験者にとって体験印象たるイメージはつねに同一である一方、そのイメージは絶えず記号化されるものである。記号は体験世界において基底的な役割を果たしており、「意識されたあらゆる体験は記号に条件づけられ拘束された (symbolbedingt und symbolbefangen) もの」(Schütz 2006: 110=1982: 71) であるとシュッツは考えている。この記号化の問題、あるいは記号生成の問題が、シュッツの間おうとしている問題である。

シュッツは自らの作業課題を、「純粋持続の内的体験から空間概念へと至る回路」をたどることで「記憶現象の根本事実のより詳細な考察において記号をそこから導き出すこと」だと規定している (Schütz 2006: 52-3=1982: 33-4)。この記号生成という問題が認識問題の前提として重要性を持つのは、「私たちが内的持続の体験とともに身を置いている空間世界と時間世界は、記憶とあなた体験によって、つまり社会的に規定された世界であり、私たちの『概念』(わたしたちの経験の原材料という意味での) は言語記号という社会的に規定された基盤の上に構築されている」(Schütz 2006: 52=1982: 33) からである。持続における記憶機能から記号の生成を論じることで、シュッツは持続の世界と概念の世界との架橋を試みている。持続は内的領域に、概念は空間時間的な外的領域に存するもの

とされ、私たちがその両者にまたがって生きていることをシュッツは記憶機能に注目することで解明しようとしている。

だが、ベルクソンを出発点として立てられたシュッツ自身の問いは、すでにベルクソン哲学を超えた地点に設定されていた。シュッツの考えでは、「ベルクソンは、記号体系の生成と発生を記号の意識平面との関連性において研究することはなかった」(Schütz 2006: 191=1982: 19)のである。そこでシュッツはベルクソンの概念装置を借りつつ独自の「生形式理論」の構築へと向かうのである。

4 生形式理論における記憶機能と意味生成

以下では「生形式」草稿の内容を検討し、具体的にどのような論理でシュッツが記号生成と意味概念の定式化を行っているのかを明らかにする。1925～27年頃に書かれたと見られる初期草稿群の中でも最も長い同草稿は、内容的にも「最も基礎的包括的な傾向」(森 1995: 232)を持っている。1920年代の初期草稿にはこのほかに言語を主題とした「言語研究」、芸術を主題とした「ゲーテ・ノヴェレ」「ある芸術形式の意味(音楽)」が存在するが、それらは特殊領域における体験と意味の分析である。これに対し、生形式草稿においては意味概念の基礎的一般的定式化に至る思考が示されている。

全集版(Werkausgabe)の編者は生形式草稿を「体験対象としての世界とその認識可能性の問題」「記号関係と記号概念の研究」「行為する私の生形式」の3つの部分に分けているので、本稿ではそれぞれ第1部、第2部、第3部と呼ぶことにしたい。第1部ではベルクソンに依拠した問題設定が提示され、持続と記憶の機

能に関する暫定的な考察が行われる。第2部でシュッツは持続と記憶についての考察に本格的に着手する。第3部では身体・運動・行為といった空間的次元に記述が移されるが、途中で切れている。このうち、意味概念が検討されているのは記憶機能による体験の記号化を論じた第1部と第2部であるので、本稿の考察対象はこの箇所限定される。

生形式という概念の定義は「世界に対する自己意識の態度(Einstellung)」(Schütz 2006: 80=1982: 52)である。具体的にシュッツが提示している生形式は、純粹持続(reine Dauer)における私、記憶付与された持続(gedächtnisbe-gabte Dauer)における私、行為する私、あなたに関係する(Du-bezogen)私、話す私、思考する私、の6つである。諸形式の一方の極は純粹持続に、他方の極は概念的・空間的世界に設定されており、6つの生形式は両極の中間において、持続の領域から概念や空間の領域へと近づく度合いに従って段階化されている。後述するが、シュッツは生形式間の関係について、純粹持続に近いほうを「より低次」の生形式、概念的思考に近いほうを「より高次」の生形式と呼んでいる。6つの形式のうち実際に生形式草稿で検討されているのは、純粹持続、記憶付与された持続、行為する私の3つである¹⁶。

私たちの実際の体験は「無数の陰影(Abschattierungen)」(Schütz 2006: 82=1982: 53)において全ての生形式の中を同時に生きているのであり、シュッツはこれらの生形式を構成された理念型として提示している。意識体験の理念型を構成する生形式理論というアプローチが持つ利点についてシュッツは、「[理念型によって]異質な諸体験の連続的な流れを起源に沿って(nach dem Ursprung)探究し整序することができる(...) [理念型は] 体験と経験の多重性

において自我の統一を私たちに教示し、生と思考、自由と形式、理念と形態を結びつける。そのような結びつけは記号論理学としての『科学』が決して成功し得ないものである」(Schütz 2006: 109-110=1982: 71) と述べ、内的領域と外的領域にまたがる諸体験を発生論的に整序することが生形式理論の利点であると説明する。認識問題の前提として記号の生成を問うシュッツはこの生形式理論というアプローチが最適だと考えたのである。

記号生成の議論のなかでシュッツが最も詳細に扱っているのは、記憶機能による体験の記号化としての意味生成である。シュッツが扱っている記憶機能は、細かく分ければ「過ぎ去った持続体験の保存」「持続の位相への参加」「持続の生成変化に伴う記憶の変化」「想起」という四点を指摘することができるが、全体としては「保存と想起」という二つの機能に要約できる。

まず、記憶の主要かつ最もよく知られた機能は、過ぎ去った体験を保存する働きである。シュッツはコインを眺める研究者の体験を例にこれを説明する (Schütz 2006: 57=1982: 36-7)。初めて見る古いコインを前にした研究者は、初めのうちは漠然とそこに何が描かれているのを見るだけであるが、次第にその形姿が明瞭に見てとれるようになる。記憶がそのつどの体験を保存し、それをもとに次の体験が行われる、という連続性の中にあるからこそ、コインを見つめ続ける研究者は徐々にその体験イメージを変化させるのである。

体験の保存の機能と関連して、シュッツは記憶が持続のあらゆる位相に参加して持続体験を共に作り上げていると指摘する。研究者のコインの見え方が一瞬ごとに変化するの、そのつど体験を保存した記憶が次の〈今このように〉の体験に参加して持続を作り上げている (mitmachen) ためである。シュッツは「私たちの持続のあらゆる瞬間は、先行する記憶イメージに X を加えたものである。この X はその瞬間のまさに本質的なものをなしている。つまり、この X はまさに持続の変化と無限の多様性を条件づけているものである」(Schütz 2006: 58=1982: 37-8) と述べる。つねに異質な諸体験の連続的生起にある持続は、その連続性と生成変化が記憶によって成り立っている。これは先述したベルクソンの相互浸透と同じ議論がなされているとも言える。

しかし、記憶自体は固定的なものではなく、持続の流れの中で変化するものである。同じ出来事であっても時の経過とともに印象が変わるといっては至極当然のことであるが、シュッツは記憶の長期的変化だけでなく、一般に「記憶それ自体が——意識に直接与えられたほかのあらゆるものと同様に——持続とともに、持続の中で多様かつ連続的に変化する」(Schütz 2006: 56=1982: 36) ということを論じている。

持続の中で変化しつつ持続の生成を条件づけるのが記憶である、という基本的な理解の下で、保存と想起の記憶機能における意味生成について説明する。図 1 はシュッツが体験と記憶

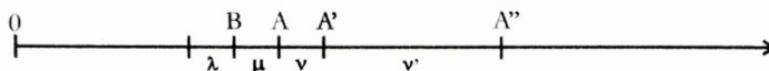


図 1 記憶付与された持続における体験と記憶 (Schütz 2006: 72 より)

の関係を図示したものである。体験 A は体験 B の記憶イメージに変化 μ が付け加わって生成し、時点 A での体験において体験 B は生成し去っている (A'、A'' についても同様)。また、時点 B、A、A'、A'' の間隔は限りなく小さいものとされる。ここでシュッツは「私の記憶は私に対して [体験] B を保存したのであるが、しかしこの [体験] B は (...) [体験] A から導き出せるものではなく、A とは通約不可能である」(Schütz 2006: 72) と述べ、生成における体験とその体験の想起はつねに不一致であることを論じる。時点 B における体験 B は、その一瞬後における体験 A において想起される記憶として保持されてはいるが、時点 B における体験 B と時点 A における (記憶となった) 体験 B とは別物だ、とシュッツは主張しているのである。

図 1 を用いて説明した事柄を要約して、まずシュッツは保存の記憶機能に着目し、「記憶は体験の代わりに体験の記号を保存する。(…) 別言すれば、私たちの記憶は体験ではなく体験の意味を保存するのであり、記憶はその意味をその体験から生成した今このようにによって保持しているのである」(Schütz 2006: 73=1982: 47-8) と述べる。体験印象が記憶される際に体験は意味へと記号化されるのである。さらにシュッツは想起の機能にも言及し、「あらゆる体験が回顧的な記憶にとってのみ有意味 (sinnvoll) である」(Schütz 2006: 73=1982: 48) と述べている。体験を意味において捉えるには保存だけでなく想起をも必要とするのである。シュッツの概念体系において体験 (質体験 (Qualitätserlebnis) と呼ばれる) それ自体は直接的かつ一次的であるのに対し、意味は選択的で二次的なものである。意味の成立を支える機制が保存と想起の記憶機能なのである。

ところで、シュッツは意味概念を「意味イメージ (Sinn-Bild)」という表現の下で論じている。意味イメージは「生成し去った質イメージが現在の瞬間において「再生された」もの (-実体化された知覚イメージ)」(Schütz 2006: 84=1982: 55) であると説明されている。記憶によって保存され、想起=再生されたイメージが意味イメージであり、「記憶イメージ」と互換的に用いられている。この表現において、意味もまたイメージであるとシュッツが考えていることに留意する必要がある。生成し去った体験が記憶機能によって記号化されたものが意味であるが、これが翻って体験印象の構成要素となるのである。したがってシュッツは、単なる意味発生にとどまらない意味生成を論じていると評価することができる。

これまでの検討で既に意味生成論の概要が提示されているが、シュッツは持続と概念との架橋を検討するために更に考察を進めねばならなかった。シュッツは命題 A 「記号と記号化されるものは、記号体験に先立つ生の諸形式の意識にとっては同一である」(Schütz 2006: 82=1982: 54) および命題 B 「記号と記号化されるものは、持続経過内でそれが属する点が異なるだけで一致しないものとなっている。生成するものが生成し去るものに移行するように、記号化されるものは記号へと移行する」(Schütz 2006: 88=1982: 56) というふたつの命題を提示している¹⁷。後者の命題 B は図 1 とほぼ同内容であるから繰り返す必要はないだろう。では命題 A はいったい何を意味しているのだろうか。この命題を理解するためには、まずシュッツにおける「純粹持続」と「記憶付与された持続」というふたつの生形式の相違、ならびに「高次」ないし「低次」の生形式という関係について補足する必要がある。

純粹知覚イメージの生起する前記号的領域が純粹持続という生形式である (Schütz 2006: 82=1982: 54)。記憶付与された持続が人間の体験する内的持続であるのに対し、いわば「純粹なる持続の連続性」とでも言うべきこの純粹持続は、実のところ人間が体験し得ない理想的抽象物である (Schütz 2006: 83=1982: 54)。敢えて純粹持続の生形式の理念型を構成したのは、シュッツが前記号的領域から記号生成の局面を捉えようと試みたからに他ならない。

シュッツは純粹持続を「より低次の」生形式、記憶付与された持続の関係を「より高次の」生形式と呼んでいる。低次の生形式は「原初的 (primitiv)」であり、高次の生形式は複雑だとされているが、これは価値判断を欠いた発生的関係が含意されている。つまり、「相対的に原初的な生形式に、新しい、以前の生形式からさらに導き出すことのできない自我機能——これは、もし生形式一般が [それぞれ] 切り離されそれ自体で体験されるものであったならば、この生形式においては体験できなかったであろう

——が付け加わる、というまさにこの事情により、私の統一のおかげで新しい、より複雑化された、より多様な生形式が発生する (entstehen) のである」 (Schütz 2006: 82=1982: 54) という事態を指している。

シュッツは純粹持続から意味が生成する過程をプリズムの分光に喩えて論じている。図2は純粹持続と記憶付与された持続というふたつの生形式の存在を踏まえて図1を拡張したものである。直線は純粹知覚イメージの生起する純粹持続を、波状の線はそのつどの記憶イメージを含んだ記憶付与された持続を、それぞれ指している。B、A、A'、A'' はそれぞれの時点における体験である。このとき、体験Bの意味は持続の流れの中で右上方向に生成するように描かれている。

これについてシュッツは「プリズムにおいて白色光がスペクトル色へと分光されるように、記号関係という事態が私の統一 (die Einheit des Ich) を分光する (zerlegen)」 (Schütz 2006: 86=1982: 55) と述べている。純粹持続という低

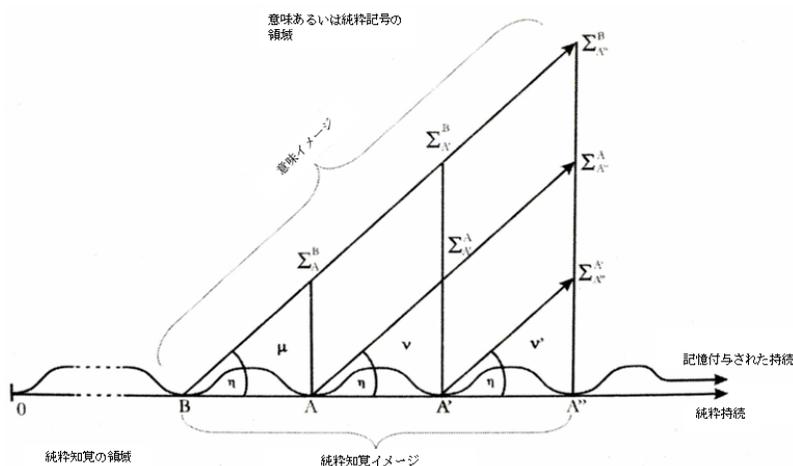


図2 持続における意味生成と二つの生形式 (Schütz 2006: 84 より)

次の生形式において、あるいはそのつど生成する純粹知覚イメージにおいて、体験はひとつである。しかし記憶機能によって、つまり記憶付与された持続の出現によって、記号化された意味イメージと体験それ自体とが区別されるのである。こうした事態を一言でシュッツは「記号と記号化されるものはより低次の生形式において同一である」(Schütz 2006: 87=1982: 56)と表現している。

こうして、シュッツが「意味は生成するものと生成し去るものの間の緊張 (Spannung) である」(Schütz 2006: 78=1982: 51) という表現に込めた内容が示される。意味は一方では体験であり、イメージであり、生成するものに属する。だが他方で意味は体験の記号化であり、生成し去るものである。こうした二面性を成立させているのは、不断に変化する体験イメージの生成する純粹持続と、保存および想起によって体験を記号化する記憶付与された持続という、生形式の二重性である。ここに緊張という形で意味概念が置かれることで、体験流とその記号化(あるいは概念)との架橋が目指されているのである。

本稿の問いは、シュッツがどのような問題関心の下で「意味問題は時間問題である」という定式化を行ったのか、というものであった。認識問題を科学的概念構成の問題として捉える新カント派や体験の直観として捉えるディルタイに反対しつつ、持続とその空間化を出発点とするベルクソン哲学に依拠するシュッツは認識問題の基礎をなす記号生成の問題へと踏み込む必要性を主張した。シュッツは非概念的体験と概念的認識の関係を再考するため、体験印象の保存と想起という記憶機能によって内的持続から意味がイメージとして生成する局面を記述し、「記号と記号化されるものはより低次の生形式

において同一である」という命題を提示した。以上を踏まえ、体験時間の流れにおける意味生成を問うシュッツの取り組みは、体験と認識を峻別しつつ認識による体験への接近可能性を考察したという意味で「体験と認識の架橋」の試みであった、と結論づけることができる。

5 シュッツの再解釈と再評価に向けて

1960年代に主観性と人間性を称揚する文脈で「発見」(浜・西原 1991)されたシュッツの学説は、初めから著者の問題関心とは独立した文脈で受容されたものである。それゆえ、シュッツのテキストの解釈の余地は大きく、その評価をめぐる様々な議論が展開された。『意味構築』において詳述されている意味概念に関して、現象学における諸学説・言語哲学・プラグマティズムといった立場から多面的な評価が提出されていることは、本稿の冒頭で述べた通りである。これに対し本稿は、シュッツにおける意味概念の再解釈と再評価の端緒を拓くべく、フッサール現象学受容以前のシュッツにおける「社会科学の基礎づけ」に焦点化し、体験と認識のはざまの立場を模索するシュッツの試みを素描した。

本稿を終えるにあたって、シュッツのベルクソン受容という観点からシュッツ再解釈に向けた展望を略述する。

生形式草稿を検討したH. ワーグナーは、シュッツが最終的に基礎づけの支柱としてベルクソンではなくフッサール現象学を援用するようになったと指摘し、その理由を意識の理念型構成と直観という方法の混合が支持し得なくなった点に求めている (Wagner and Srubar 1984: 58-62, 116-7, 125-7, 136-7)。ワーグナーはベルクソンのシュッツに対する影響が終生続くもので

あったことに留意しつつも、現象学はシュッツにとってベルクソンの困難を克服する方法論的画期であったと考えている。

これに対し本稿の議論の延長線上には、内容面でのベルクソンの影響とフッサールの影響との区別が可能であるという見解が浮上する。前科学的領域における意味生成を論じることによって認識問題の前提となる哲学的問題に取り組んだシュッツであったが、生形式草稿は認識問題に再び立ち戻ることなく中断されている。生形式草稿第1部の最後でシュッツは草稿の目的として、体験とその空間化の問題を検討することの他に理解社会学の方法を精密に定式化することを挙げているが（Schütz 2006: 64-5=1982: 42）、同草稿でこの地点に辿り着くことはなかったのである。シュッツは草稿の構想メモにおいて、ベルクソン哲学に必要なものとして「あなたと意味の問題、理解、類型、記号」などを挙げているが（Schütz 2006: 180）、これらが理解社会学の問題として展開されるのは『意味構築』においてである。以上を踏まえると、シュッツの構想した「社会科学の基礎づけ」はフッサール現象学によって補完されることで初めて遂行され得るものであったと考えることができる。以上の仮説的考察からは、シュッツのベルクソン受容の評価およびシュッツ自身の問題関心に対するベルクソンとフッサールの意義を再考する余地を示唆しているが、これは今後の検討課題である。

注

¹『社会的世界の意味構築』（原題は *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt* であり、以下『意味構築』と表記する。なお邦訳題は『社会的世界の意味構成』である）におけるシュッツの反省的対向の議論を要約すれば、以下のようになる（Schütz 1932:

43-74=2006: 77-116）。まず意識内において、いかなる意味も有さない体験流が存在するとする。連続的に推移するこの流れの中で体験は絶えず経過し去ったものへと移行する。経過し去った特定の体験がこの流れから縁取られ際立たされることで、体験の意味が構成される。こうしたシュッツの議論の構造を扱った研究としては、浜（1985）や丸山（1985）などを参照。

²これに対する反論は鳥越（2013）を参照。

³シュッツ自身、『意味構築』においては「表面的に分析するだけですでに意味問題は時間問題であることが示される」（Schütz 1932: 9=2006: 35）、「社会科学の基礎概念について論じようとする者は、この深層への骨の折れる途を避けて通るわけにはいかない」（Schütz 1932: 10=2006: 35）と述べるにとどまり、彼の問いがこのような形で立てねばならなかった必然性は明示されていない。

⁴ただしシュッツは生前発表した論文の中で自らの置かれた問題状況を体系的に提示することはなかった。本稿が試みるのはシュッツの問題状況の再構成である。シュッツは実際にはどのような順序で問題関心を醸成させたのか、具体的には誰の著作のどの箇所を読んだ（あるいは読まなかった）のか、といった点は別途検討せざるをえない。

⁵この草稿はI. スルバールの編集によって1981年に初めて刊行された。同草稿を引用する際、本稿は全集版（Alfred Schütz Werkausgabe）およびH. ワーグナーによる英訳の頁数を付す。ただし訳書で省略されている箇所については訳書のページ数を記さないこととする。また、全集版の編者によると1925年7月に書かれた別の草稿においてこの草稿への言及がみられることから（Schütz 2006: 46）、この頃には既に構想が始まっていたと考えられる。初期草稿群に関する文献考証は、森（1995: 231-2）に詳しい。

⁶なお、生形式草稿における意味概念を検討した先

行研究としては、矢部（1999）を参照。

⁷ 思想史的コンテクストとの関係でシュッツの学説を検討した試みとして、Luckmann（1982）、Srubar（1984; 1988）、森（1995）、Nasu et al. eds.（2009）を参照。ただし、シュッツ研究の膨大な蓄積に比してこのような試みは少ない。

⁸ 新カント派が登場した哲学史的背景には、ヘーゲル死後の哲学における非合理主義や厭世主義の台頭に対する批判がある（高坂 1940: 5）。

⁹ 旧仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体は新字体に変えている。以下の引用でも同様である。

¹⁰ 同様の批判は『論理学研究』におけるフッサールにも向けられている（Schütz 2006: 185=1982: 15）。

¹¹ I. スルバルはこのような批判が新カント派と論理実証主義に向けられたものであることを指摘している（Srubar 1988: 47-48）。

¹² ある瞬間的な一時点においてひとつの体験が存在するという見方は、本来の持続のあり方ではなく言語的に分析されたものだという点に留意されたい。

¹³ このように述べるベルクソンは、持続への沈潜

の障害となる記号化の習慣に対して負の価値づけを行っていると考えられる。だが以下で検討するシュッツの記号化の議論はこのような含意を持たない。

¹⁴ シュッツの後期の著作「シンボル・現実・社会」においても symbol という概念が登場するが、ここではベルクソンの symbole の定訳である「記号」という言葉を使用する。

¹⁵ ただしベルクソンは「イメージは、知覚されることなく存在することができる。イメージは、表象される（être représentée）ことなくわれわれの前に現前する（être présente）ことはできる」（Bergson 1911: 22=2011: 46）と述べ、イメージと知覚という二つの用語を慎重に区別して議論している。

¹⁶ 生形式草稿は、「行為する私」の検討の途中で執筆が中断されている。残りの3つの生形式については「言語研究」（Schütz 2003: 37-78）で短く触れられている。

¹⁷ 草稿中ではシュッツは命題 A と命題 B を合わせて「命題 1」とし、その他に4つの命題を論じているが、本稿では扱わない。

文献

Bergson, Henri, 1908, *Essai sur les données immédiates de la conscience (sixième édition)*, Paris: Félix Alcan. (= 2010, 竹内信夫訳『意識に直接与えられているものについての試論』白水社.)

———, 1911, *Matière et mémoire: essai sur la relation du corps à l'esprit (septième édition)*, Paris: Félix Alcan. (= 2011, 竹内信夫訳『物質と記憶——身体と精神の関係についての試論』白水社.)

Dilthey, Wilhelm, 1922, *Einleitung in die Geisteswissenschaften: Versuch einer Grundlegung für das Studium der Gesellschaft und der Geschichte (Gesammelte Schriften I. Band)*, Leipzig: B.G. Teubner. (= 1979, 山本英一・上田武訳『精神科学序説——社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み 上巻』以文社.)

———, 1927, *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften (Gesammelte Schriften, 7. Band)*, Leipzig: B.G. Teubner. (= 1981, 尾形良助訳『精神科学における歴史的世界の構成』以文社.)

浜日出夫, 1985, 「シュッツと『意味』の社会学」江原由美子・山岸健編『現象学的社会学——意味へのまなざし』三和書房, 91-107.

浜日出夫・西原和久, 1991, 「両義性を生きる——問題としてのシュッツ」西原和久編『現象学的社

- 会学の展開』青土社, 13-40.
- 高坂正顯, 1940, 『カント學派』弘文堂書房.
- Luckmann, Thomas, 1982, “Einleitung,” Alfred Schütz, hrsg. von Richard Zaner, *Das Problem der Relevanz*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 7-23.
- 丸山高司, 1985, 『人間科学の方法論争』勁草書房.
- 森元孝, 1995, 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論.
- 守永直幹, 2006, 『未知なるものへの生成——ベルクソン生命哲学』春秋社.
- 向井守, 1997, 『マックス・ウェーバーの科学論——ディルタイからウェーバーへの精神的考察』ミネルヴァ書房.
- Nasu, Hisashi, George Psathas, Ilja Srubar and Lester Embree eds., 2009, *Alfred Schutz and His Intellectual Partners*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- 西原和久, 1997, 「モーリス・ナタンソンとの対話——シュッツと現象学的社会学者たち」『現代社会理論研究』7: 3-22.
- Renn, Joachim, 2006, “Appresentation and Simultaneity: Alfred Schutz on Communication between Phenomenology and Pragmatics,” *Human Studies*, 29: 1-19.
- Rickert, Heinrich, 1926, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft (7. Aufl.)*, Tübingen: J. C. B. Mohr. (= 1939, 佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』岩波書店.)
- Schnädelbach, Herbert, 1983, *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2009, 舟山俊明・朴順南・内藤貴・渡邊福太郎訳『ドイツ哲学史 1831-1933』法政大学出版局.)
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Verlag von Julius Springer. (= 2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——理解社会学入門(改訳版)』木鐸社.)
- , 2003, *Theorie der Lebenswelt 2: Die kommunikative Ordnung der Lebenswelt (Alfred Schütz Werkausgabe Bd. V.2)*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- , 2006, *Sinn und Zeit: Frühe Wiener Arbeiten und Entwürfe (Alfred Schütz Werkausgabe Bd. I)*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (=1982, Helmut Wagner trans., *Life Forms and Meaning Structure*, London; Boston: Routledge & K. Paul.)
- , 2009, *Zur Kritik der Phänomenologie Edmund Husserls (Alfred Schütz Werkausgabe Bd.III.1)*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- Srubar, Ilja, 1984, “On the Origin of ‘Phenomenological’ Sociology,” *Human Studies*, 7: 163-89.
- , 1988, *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 鳥越信吾, 2013, 「A・シュッツにおける時間論」『社会学史研究』35: 65-80.
- Wagner, Helmut R., 1977, “The Bergsonian Period of Alfred Schutz,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 38(2): 187-99.

Wagner, Helmut R. and Ilja Srubar, 1984, *A Bergsonian Bridge to Phenomenological Psychology*, Washington, D.C.: University Press of America.

Waldenfels, Bernhard, 1980, “Verstehen und Verständigung: Zur Sozialphilosophie von A. Schütz,” *Der Spielraum des Verhaltens*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 205-22. (= 1989, 村田純一訳, 「理解と相互諒解 —— A. シュッツの社会哲学」『行動の空間』白水社, 273-96.)

矢部謙太郎, 1999, 「記憶と私の統一 —— シュッツ初期草稿に関する一考察」『社会学年誌』40: 111-124.

山口節郎, 1982, 『社会と意味 —— メタ社会学的アプローチ』勁草書房.

(たかくさ けん、東京大学大学院人文社会系研究科、nm7.tk.shogi@gmail.com)

(査読者 木村正人、小山裕)

Between Experience and Cognition: Becoming of Meaning in Alfred Schutz and His Research Interest

Ken TAKAKUSA

The purpose of this paper is to clarify Alfred Schutz's question when he formulates the problem of meaning as a time problem. Schutz situates himself in the historical context of the problem on the philosophical foundation of social sciences, and criticizes Neo-Kantianism as a logic of cognition on one hand and Dilthey's method of intuitive and nonconceptual understanding on the other hand. Schutz recognizes the necessity to correct the premise or the starting point of these attempts at foundation. Accepting Bergsonian philosophy, which is based on the opposition between inner duration and its spatialization, Schutz views the becoming of symbols as the premise of epistemological problems. Following Bergson, Schutz considers that lived experience (*Erlebnis*) as such exists in the sphere without symbol. In the manuscript written in 1920s entitled “Life Forms and Meaning Structure,” Schutz constructs the theory of life forms and analyzes several spheres of consciousness by building ideal types. Schutz argues that the functions of memory transform lived experience into symbol and generate meaning images. In the duality or multiplicity of life forms, meaning belongs to lived experiences and images, while it is the symbolization of lived experiences. In conclusion, this paper finds out that Schutz treats the concept of meaning as becoming in the flow of consciousness in order to build a bridge between lived experience and cognition as the fundamental problem of epistemology of social sciences.